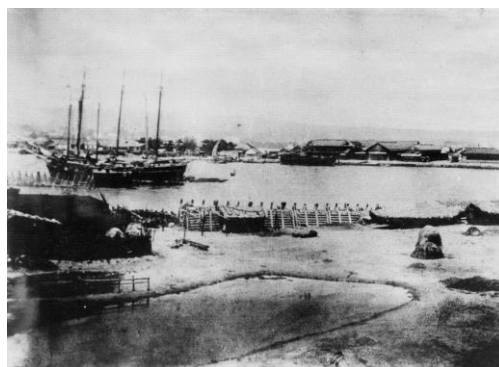


3 北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致

(1) はじめに

伏木は、日本海に面し、小矢部川の河口に位置している。古代には越中の国府が置かれ、越中の政治・経済の中心として栄えたことに加え、恵まれた立地を活かし日本海側でも有数の港として発展した。伏木開港場の様子は、明治32年（1899）の写真から見るができる。



伏木開港場（明治32年（1899））

江戸時代には、加賀藩から渡航の許可や税の徴収といった公的な役割を認められ、大坂から瀬戸内海、下関を廻って日本海に入り、北は北海道まで、各港で買積した物資を売りさばく北前船（バイ船）で栄えた。特に、港に程近い旧伏木村（現在の本町、中央町、湊町、錦町のあたり）には、北前船で財を成した多くの廻船問屋が現れた。この廻船問屋は、明治期に入ると、大型船舶の入港など徐々に近代化を迫られた際に大きな活躍を見せた。特に、能登屋の藤井能三は、強く開港を訴え、私財を投げ打って伏木燈台や伏木測候所（高岡市伏木気象資料館）を建設するなど伏木港の近代化に大きな役割を果たした。後に、伏木は港町として大きく発展するが、それは町並みからも見るができる。

本町通りは、最も早くから町並みが形成された場所で、かつては廻船問屋の邸宅が多くあったところである。現在は、明治期から大正期に建てられたとされる切妻造り・平入り・2階建て・登り梁形式の真壁造りの町家を見ることができる。中道通りや湊町本通りは、明治以降の港の近代化と発展の中で、町が拡大していったと考えられ、国外などからの文化流入の結果生み出されたと思われるハイカラな洋風建築や和洋折衷建築、この道が耐火路線に指定されたことに起因する土蔵造り家屋など多様な建造物を見ることができる。伏木の代表的な廻船問屋である藤井家の残した『藤井家文書』のなかに、当時の住民の屋号をみることができる。これによれば、網屋や鍛冶屋、浜屋、魚屋、茶屋、油屋、酒屋など様々な職業を類推させる屋号がある。現在では、港の近代化に伴って人々の職業形態もかなり変容を見せているが、今でも魚屋やお茶屋、酒屋、石油卸商などかつてと変わらない仕事を営む店舗が数多くあり、輸出入した商品などを取り扱う商社が数多くみられる。なお、伏木港は現在、国際拠点港湾伏木富山港として環日本海交易の拠点となっている。

一方、吉久は、伏木の対岸に位置しており、江戸時代、加賀藩直営の御蔵が設置されていた。その様子は、『吉久御蔵出船御米等積出堀川并土居川除之分間絵図（文化2年（1805））』から見る事ができる。また、その規模は間口30間、奥行き4間の大きな建物が6棟も配されていた。これは、他所の御蔵が1～2棟であったことと比べても破格の規模であった。



吉久御蔵出船御米等積出堀川并土居川除之分間絵図

（文化2年（1805））財団法人高樹会蔵、射水市新湊博物館寄託）一部加工

さらに、単に年貢米を収納するだけでなく、砺波・射水両郡の御蔵の中で唯一、両郡の収納米の詰込所でもあり、小矢部川や庄川を下って運ばれてくる年貢米の集散地であった。この時代、各藩の領域経済が次第に全国市場の中に取り込まれ始めると、米価も大坂の米市場において設定された価格に左右されるようになり、年貢の取立てや支配等をめぐり農民とのトラブルが絶えなかった。その対応策として、加賀藩が御蔵の設置や十村制度の整備、灌漑用水の整備を実施し、年貢の確実な徴収と百姓など民衆の生活の安定を図ったと言われている。こうして、吉久は、伏木港から廻米が積み出される玄関口という重要な役割を担っていた。その機能は明治期に入っても失われることはなく、かつての御蔵はそのまま米や魚肥の倉庫として使用されるなど、吉久は変わらず伏木港への最前線基地としての役割を果たしていた。

伏木と吉久は、小矢部川と深く結びつき、それを利用した水運によって発展してきた地区である。この地区の町並みや伏木神社 春季例大祭の祭礼行事などの地域固有の文化には、小矢部川や伏木港を介して交流した様々な足跡が今もなお残され

ている。またこの地区には、^{しょうがわ}庄川や^{おやべがわ}小矢部川にかつて存在していた渡し場や橋があった。現在ではその名残として、^{ふしき}伏木には「^{によいのわたしあと}如意渡跡」碑があり、^{よしひさ}吉久には^{ふしき}伏木橋の跡が現存している。この^{よしひさ}吉久の^{ふしき}伏木橋の跡がある対岸には、かつて^{べいしょう}米商たちの倉庫や石灰工場などがあったようである。



伏木橋の跡（吉久）

※ ^{べいしょう}米商…米穀売買や倉庫業に進出し成功を収めた^{よしひさ}吉久の有力な町民のこと。

(2) 歴史的風致を形成する建造物等

(伏木神社 春季例大祭の祭礼行事に関連)

①高岡商工会議所伏木支所

明治43年(1910)に伏木銀行として建てられた建物で、平成8年(1996)に国の登録有形文化財に登録された。建築形式は、土蔵造り・2階建て・寄棟・瓦葺で、外壁はスクラッチタイルである。



高岡商工会議所伏木支所

②棚田家住宅

棚田家住宅は、主屋、^{よりつきまちあい}寄付待合、水屋、茶室及び3棟の土蔵で構成される建物群で、主屋は間口6間、奥行8間を有し、^{かいせんどんや}廻船問屋としての間取りや良質の建築材を使用している。明治23年(1890)頃に建築されたと推定され(平成9年(1997)登録有形文化財の登録要旨より)、^{きたまえぶね}北前船交易による伏木の繁栄を物語る建物群として貴重である。



棚田家住宅

③谷村家住宅(主屋)

明治初期に建てられたもので、平成9年(1997)に国の登録有形文化財に登録された。間口5間の大規模な切妻造り、平入り、^{しゅおく}棧瓦葺の建物である。屋根は、現在は棧瓦葺となっているが、周囲の建物と比べると屋根勾配が緩やかなことから、もとは板葺きであったことがわかる。明治初年建設と推定される。(平成9年(1997)登録有形文化財の登録要旨より)



谷村家住宅主屋

④^{ふし き じんじや}伏木神社

伏木神社は、伊勢神宮から^{ふ し うら ぞう が はま}布師浦の蔵ヶ浜に勧請され、海岸鎮護・住民の守護神として創祀されたと伝えられ、『富山県神社誌（昭和 58 年（1983））』によると文化 10 年（1813）に波の浸食を受けたことから現在地に遷座した由緒ある神社である。寛文 6 年（1666）に発布された浦高札（うらこうさつ／うらたかふだ）のほか、境内には歴史を感じる大木や鎌倉時代に創作されたとも伝わる狛犬が残っている。鳥居には、「昭和二十八年九月建之」との刻印が見られる。



伏木神社



伏木神社鳥居

昭和 28 年 9 月建之
との刻印が見られる

（^{よしひさしんめいしや しゅう き れいたいさい}吉久神明社の 秋季例大祭に関連）

⑤^{よしひさ}吉久伝統的建造物群保存地区

吉久は、^{よしひさ お や べ が わ しやうがわ}小矢部川と庄川に挟まれた河口に位置しており、藩政時代から藩の収入となる御詰米の御蔵のあった町である。米などの物資の集散地であると同時に^{おくら}御蔵の役目を務める人やさまざまな商売に携わる人々が集まる都市的性格を持つ在郷町であった。明治以降は米穀売買や倉庫業を中心に栄えた。^{ほうじょうづ}放生津往来沿いには幕末から昭和 30 年代にかけて建てられた^{よしひさ}吉久特有の切妻造り平入りの町家残り、河口部に栄えた^{ざいごうまち}在郷町の様子をよく伝えている。



吉久の町並み

⑤-1 能松家住宅（主屋） のうまつ け じゅうたく しゅおく

明治末期から大正初期のものと推定され（平成9年（1997）登録有形文化財の登録要旨より）、国の登録有形文化財となった建物である。間口は4畳半で3間分は出格子が取り付いている。室内構成も整っており、建設当時の外観をよく残す貴重な建造物である。



能松家住宅主屋

⑤-2 有藤家住宅 ありとう け じゅうたく

大正5年（1916）～同6年（1917）頃に建てられ、平成10年（1998）に国の登録有形文化財となった建物である。平面は間口の広い2列3室型で、背面に半間の下屋が付く。右側列は玄関、オイ、奥に1室、左側がミセ、仏間、座敷で構成されている。



有藤家住宅

⑤-3 丸谷家住宅（旧津野家住宅） まる や け じゅうたく きゅうつ の け じゅうたく

明治中期（1883～1897）に建てられた建物で、大正期（1912～1926）に増築された。平成25年（2013）に登録有形文化財となっている。構造は木造平屋一部2階建て、切妻造り棧瓦葺であり、正面外観は繊細な格子と簾子下見板張ささら こじた みで構成されている。



丸谷家住宅（旧津野家住宅）

⑤-4 吉久神明社 よしひさしんめいしゃ

天保4年（1833）に建てられたとされる入母屋造り・棧瓦葺・正面屋根破風・1間の向拝を流した拝殿。なお、市指定有形文化財である石造の狛犬には「天文廿四年」にじゅう よねん（1555）の銘がある。また、鳥居には「昭和十四年」と刻印されている。



吉久神明社

昭和14年との
刻印が見られる

（3）歴史的風致を形成する活動

①伏木神社 春季例大祭の祭礼行事

海岸鎮護・海上安全の神を祀る伏木神社で行われる伏木神社 春季例大祭の祭礼行事は市指定無形民俗文化財に指定されており、毎年5月の第3土曜日とその前日に行われる。曳山の蔵出しに始まり、山宿での山飾り、神輿渡御、花傘山車、夜間は提灯山車の次第で行われている。その歴史は古く、行事に用いられる山車の箱書きには、文政3年（1820）や天保2年（1831）といった記録が見え、少なくとも200年間は続けられていると考えられる。

i) 準備

祭りに用いられる山車は、山蔵より蔵出しされる。山車が順次曳き出されるうちに町全体に祭の気分が色濃く流れ始める様子は、祭りを待ちきれない人々の気持ちを更に高めるような雰囲気を醸し出している。

祭前日には宵祭が催される。宵祭では、山車の飾り付けとともに、山宿に御神体が飾られ、御膳やお酒が並べられ披露される。山宿は、その年に出産や結婚などおめでたいことがあった家が選ばれるが、この地域の人々にとっては、至極光栄なこととなっている。



曳山祭山宿の飾り

ii) 当日

当日は、伏木神社の拝殿で例大祭と神輿渡御祭が厳かに挙行される。境内での神事後、神輿の巡行が開始される。神輿渡御は、母衣武者行列と花傘がともに巡行する古い形式をよく残すもので、夕方前に伏木神社へ還御されるまで、氏子町内を順次巡行される。

土曜日の朝から各町の代表者が伏木神社へ集まり、その日の無事を祈ってお祓いを受ける。祭りのメインである伏木曳山祭も同時に始まっている。朝早くから飾り付けが行われ、美しい花傘山車が作られる。山車には、雲獣（龍や唐獅子）、自然（波や雨）、動植物が丸彫、浮彫、透彫の手法で彫刻されており、塗装は、漆と金箔を基調とし、



花傘山車

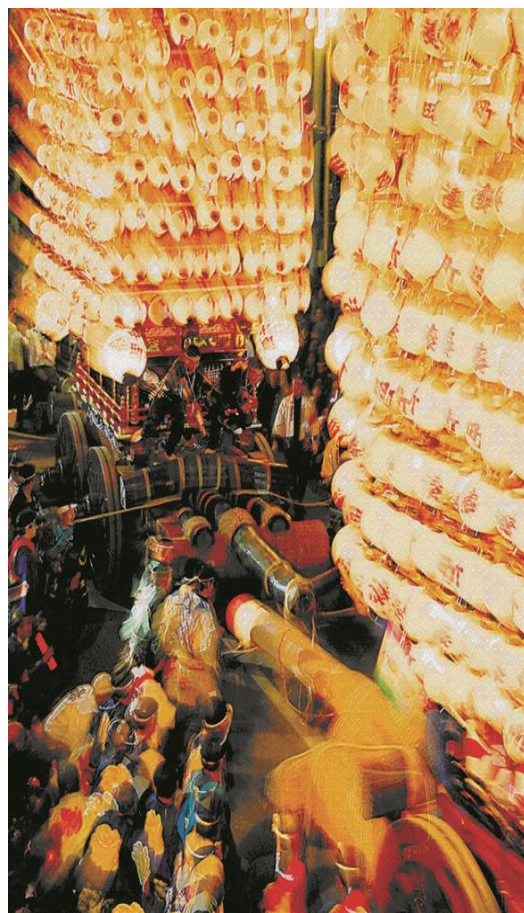
彩色豊かである。花傘は、戦前までは赤一色であったと言われているが、現在は、赤に加えて黄や白も見られる。

飾り付けが完了すると、山車に御神体を移して神楽の奏上が行われた後、勇ましく町内曳きが行われる。各町の代表者は御幣を受け、それを山車の心柱に取り付けるとともに山車は順次伏木神社に向かう。その後、お囃子の音色と曳き子たちの「イヤサー一、イヤサー」の掛け声にあわせて、谷村家住宅（主屋）や高岡商工会議所伏木支所、棚田家住宅があるハイカラな町並みを舞台に山車が曳き回され、一層その華やかさが際立つ。街路網は基盤目状に敷かれているうえに、その路は細く、直角の曲がり角が多いが、曳き子たちは曳き子頭の合図のもと、テコの原理で長手をうまく利用して山車を方向転換する。チームワークよく曲がる光景は見事で、観客は拍手を送って喜ぶ。

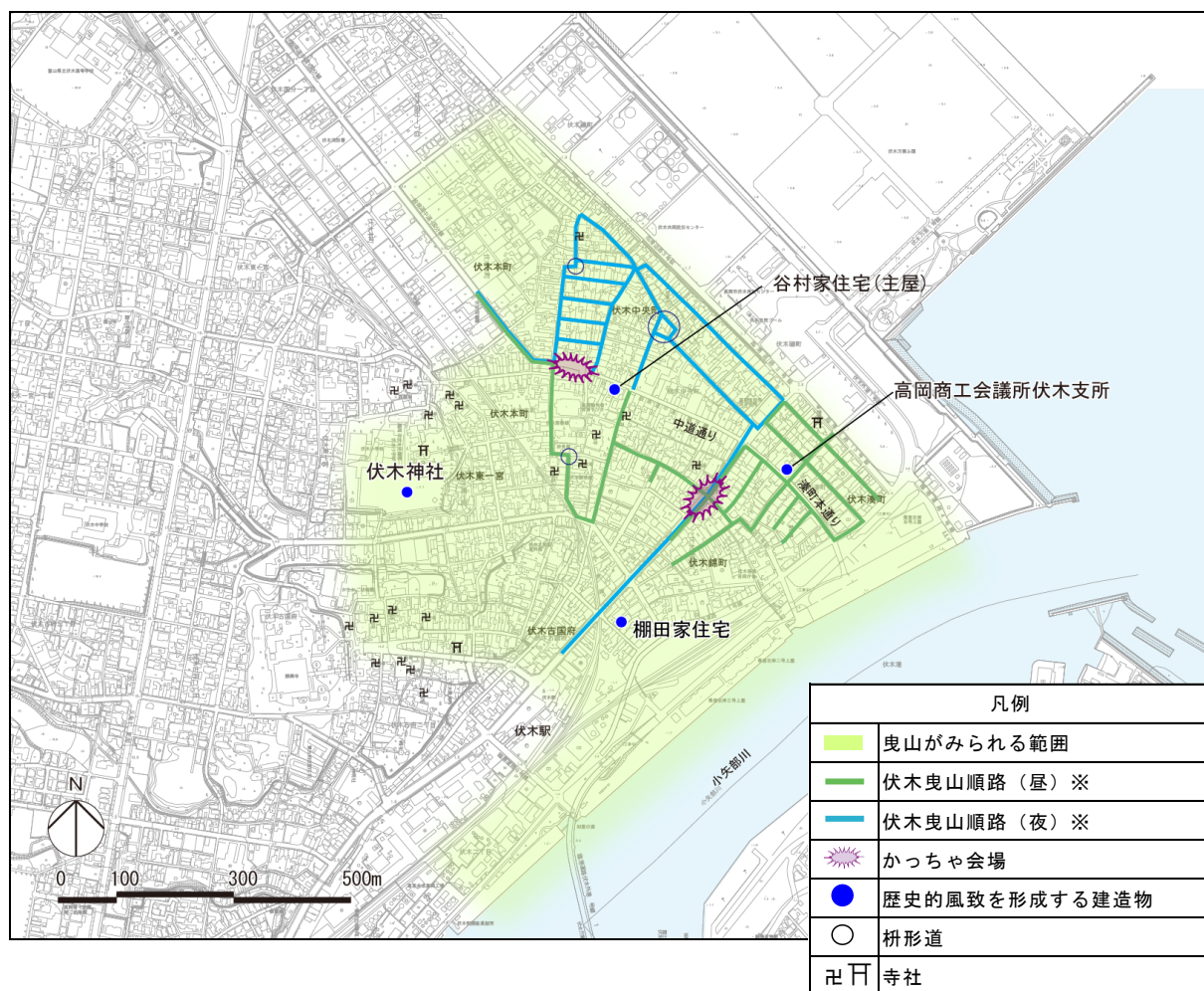
花傘山車の奉曳が夕方頃まで続けられた後は、一旦山蔵へ移し解体され、今度は提灯山車へ組み替えられる。提灯山車は飾り付けられた山車同士が激しくぶつかる（通称「かっちゃ」）もので、日中の花傘山車とは趣が全く異なり、はじめて見るものならば必ず「おおー」と歓声をあげるほど非常に勇ましいものである。提灯台は、初期の頃は竹で作られており6段ほどであった。現在のように頑丈な提灯台が使われるようになったのは大正10年（1921）からで、段数も8～9段となった。

提灯山車の曳き出しは夜のはじめ頃から始まるが、この時刻になると、「かっちゃ」が行われる場所には、大勢の人々が押し寄せる。この時ばかりは、家々の窓は全て開けられ、家族や親族などが身を乗り出して観戦する。観客の見守る中、双方の山車の総代の合図により拍子木が打たれると、いよいよ開始である。

お囃子と曳き子たちの勇ましい掛け声とともに、今にも壊れそうな勢いで山車が「ずしーん」とぶつけられる。山車に飾り付けられた提灯は激しく揺れ、落ちるものもある。間髪容れずに拍子木が打ち鳴らされると、2基の山車は、再び激しくぶつけられる。



かっちゃの様子



※伏木曳山順路は年度によって昼夜入れ替え

図：伏木神社の春季例大祭に係る範囲

②吉久神明社の 秋季例大祭

吉久の獅子舞は、吉久神明社の 秋季例大祭で舞われるものである。

i) 成り立ち

かつて吉久では、あんころの獅子とおもての獅子の二つの獅子舞があった。あんころの獅子は、通称あんころの宮といわれる日の出町神明宮の祭礼行事として舞われたもので、吉久の町の中心を通る放生津往来から東側あたりに位置する地域を指す言葉であり、加賀獅子（砺波獅子の一つとされる）の流れを汲み、なぎなたや棒を激しく振り回す荒っぽいものであった



昭和 15 年（1940）吉久の獅子舞
（『よっさ神社と獅子舞』より）

と伝わる。おもてとは、放生津往来ほうじょうづの西側、御蔵おくらの置かれた方角で、町の発展と併せて拡大していった地域を指している。おもての獅子も、あんころの獅子と同じく、棒術やなぎなたの武術を中心としたもので、時には見物人が怪我をするほど荒っぽいものだったと伝わる。このあんころの獅子、おもての獅子は、ともに起源をはっきりと記すものはないが、口承では近世末から明治初期には既に始まっていたようであり、昭和戦前の写真には獅子舞の様子が収められている。

この両獅子舞とも若者の減少等により伝承の危機を迎えたが、昭和35年（1960）頃に青年団が中心となって両獅子の合併がなされ、現在の吉久よしひさの獅子舞が生み出された。現在の吉久よしひさの獅子舞は、獅子の胴に何人もの人が入る百足獅子で、かつての両獅子の荒っぽい性格をよく受け継いでいる。天狗が棒やなぎなた、たいまつを縦横に振り回して獅子に立ち向かうという豪快な演目で構成されているほか、射水獅子いみずじしの影響を受けているとされるキリコが獅子と戯れる所作もある。

ii) 当日

祭りは朝から始まる。はじめに、吉久神明社よしひさしんめいしゃで獅子の宮参りが行われる。ここで獅子頭に御幣を付けてもらい二舞、三舞した後、日の出の宮、浅野の宮と獅子舞が奉納される。それから町内を回るが、近年では全町が公平になるよう回る順番を毎年変えている。

吉久の本通りは、かつて能登から富山市岩瀬いわせへと至る浜往来から放生津ほうじょうづで分かれ高岡へと向かう放生津往来ほうじょうづが通っていた場所で、今も藩政期のままの湾曲した道路が残し、道路の両側には、幕末から昭和30年代に建てられた伝統的な町家が建ち並んでいる。能松家住宅のうまつけじゅうたく（主屋）や有藤家住宅しゅおく、丸谷家住宅ありとうけじゅうたく（旧津野家住宅まるやけじゅうたく）などの町家は、軒の深い町家の外観を呈し、裏手まで抜ける通り土間がないことなどが特徴として挙げられる。これは、米商べいしょうの店は対岸の伏木ふしきにあり、放生津往来ほうじょうづ沿いの町家は住居専用であったこと、加えて吉久は古くから農村地帯であったという2つの要素から生み出されたものと推測される。

町内を回る際は、めでたいことがあった家が選ばれて獅子舞が舞われる。各家では花（祝儀）が打たれると、獅子あやしと獅子はしゃがみこみ、その間に紋付袴の世話方が中腰になりショモウ（目録）をあげ威勢よく口上を述べる。

ショモウ ショモウ 目録一つ！ 御酒万樽 御肴沢山！
金子有り有り右は人気栄富栄富！ 御鼈貞～
とあって〇〇様より吉久獅子舞若連中に下さる～

口上が詠み終わられると、獅子が勢いよく目録をくわえ、玄関先まで入り込み、舞を見せる。獅子はバクバクと激しく口を開け閉めしながら大きな動きを見せ、これを

あやす主役は青年の扮する天狗である。太鼓と笛の音が鳴り響く中、ずっかうそと呼ばれる被り物をし、袂の着物に野衿をはき、小手をした天狗と、その出で立ちに天狗の面をかぶった大天狗が出て、六尺棒や刀、なぎなたなどを持ち、勇ましい武術で獅子に立ち向かう。

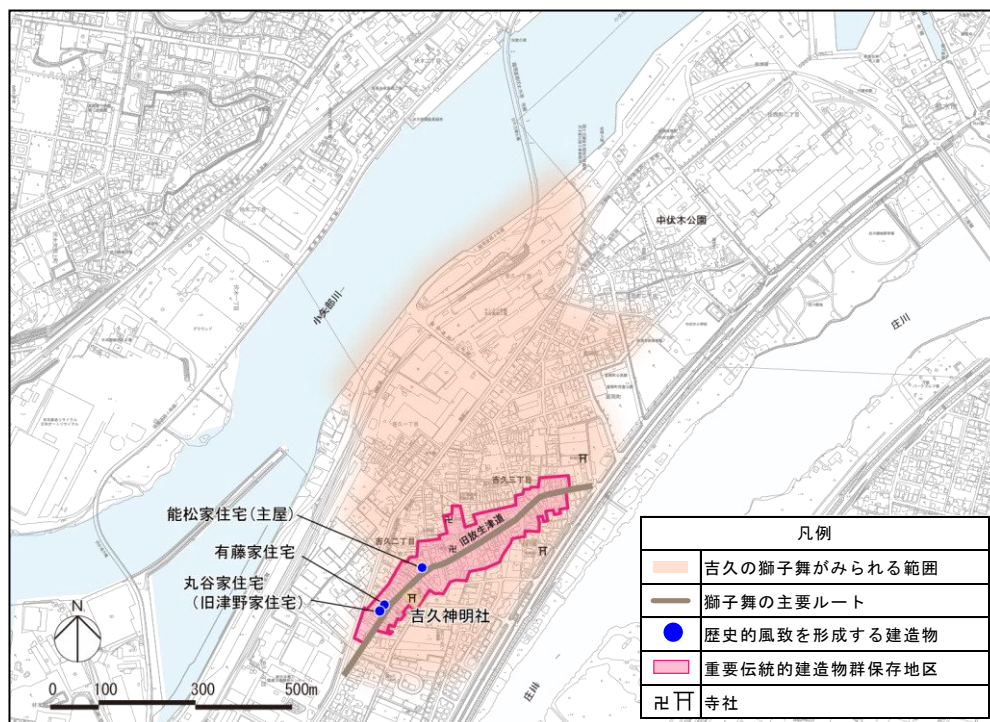
また、吉久の獅子舞の大きな見所の一つにハイッタ・ハイッタがある。これは、家の座敷まで獅子が上がこみ、家の中で獅子が踊るものである。ハイッタ・ハイッタの会場と決まった家では、家の中を仕切る建具を外して舞の舞台を準備し、獅子が来るのを待つ。獅子が来ると、人々は身を乗り出しながら口上を見つめる。口上が終わると獅子はものすごい勢いで座敷へと突入し、舞が行われる。獅子方も力が入るのか、外で見るよりも遥かに激しく見え、その様子を見つめている人々は熱狂し大きな歓声をあげる。



獅子舞の様子



ハイッタ・ハイッタの様子



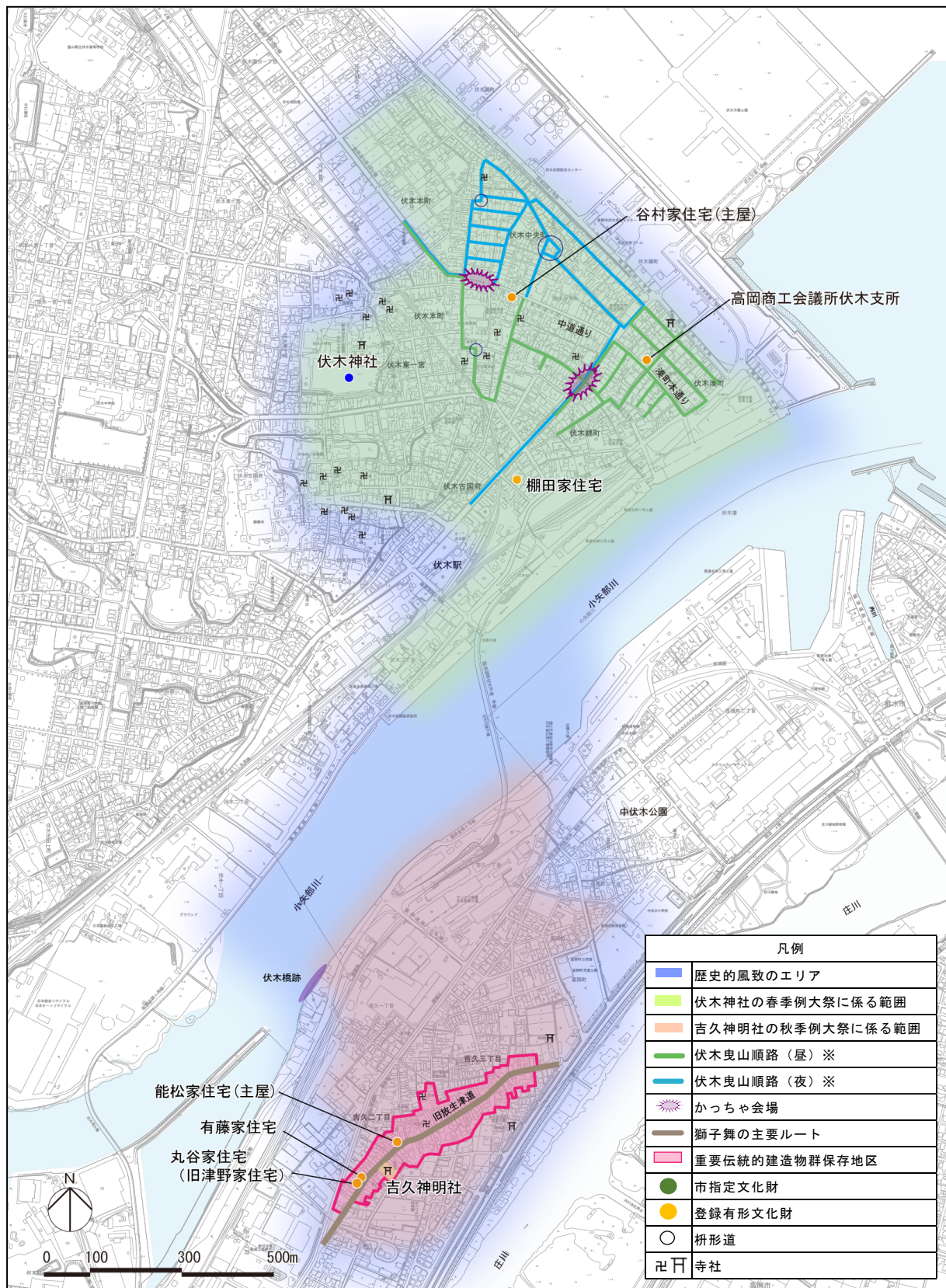
図：吉久神明社の秋季例大祭の範囲

（4）まとめ

古くから舟運で栄えた伏木には、伏木神社の春季例大祭の祭礼行事で「かつちゃ」と呼ばれる山車同士をぶつけ合う勇壮な行事が伝えられている。行事は、曳山の蔵出しに始まり、山宿での山飾り、神輿渡御、花傘山車、夜間は提灯山車の次で行われる。雲獣（龍や唐獅子）、自然（波や雨）、動植物が彫刻されて、漆と金箔を基調とし、彩色豊かな塗装が施された山車に、赤黄白のカラフルな花傘が取り付けられた美しい花傘山車が囃子の音色と曳き子達の「イヤサー、イヤサー」の掛け声にあわせ、谷村家住宅（主屋）や高岡商工会議所伏木支所、棚田家住宅を通り、ハイカラな町並みを舞台に曳き回される。その後、花傘山車は提灯山車へ組み替えられ、「かつちゃ」と呼ばれる山車同士をぶつけ合う。お囃子と曳き子衆の勇ましい掛け声とともに、今にも壊れそうな勢いで山車が「ずしーん」とぶつけられ、山車に飾り付けられた提灯は激しく揺れ落ちるものもあるなど非常に勇ましい様子は、港町特有の豪快な気質と郷土意識を再認識する場として受け継がれ、町家等の和洋折衷建築と相まって、独特な歴史的風致が形成されている。

また、吉久では、能松家住宅（主屋）や有藤家住宅、丸谷家住宅（旧津野家住宅）などの伝統的な町家の外観を呈する家などを、百足獅子と呼ばれる獅子が巡行する。太鼓と笛の音が鳴り響く中、獅子はバクバクと激しく口を開け閉めしながら大きな動きを見せ、ずっかうそと呼ばれる被り物に野衿をはき小手をした天狗と、天狗の面をかぶった大天狗が、六尺棒や刀などを持ち勇ましい武術で獅子に立ち向かう。荒々しく大きな動きの獅子舞が繰り広げられ、普段静かな町並みも人々で賑わい、周辺の市街地と一体となった歴史的風致を形成している。

伏木と吉久は、小矢部川と深く結びつき、それを利用した水運によって発展してきた地区である。この地区の町並みや地域固有の文化には、小矢部川や伏木港を介して交流した様々な足跡が残されており、良好な歴史的風致を形成している。



図：北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致

（コラム）～^{ふし き ほ ばしらおこ いわいうた}伏木帆柱起し祝唄～

^{ふし き ほ ばしらおこ いわいうた}伏木帆柱起し祝唄は、毎年春先の出港準備の際に船主を中心とした地元の人達が浜へ集まり、航海の安全を祈り、^{かね}鉦や太鼓を打ち鳴らし、「^{き や うた}木遣り歌」を歌い踊りながら帆柱を立てたことに由来するもので、ソリャエーという力強い掛け声が印象的である。

ソリャエー帆柱起しで ヤーレン ソリャ ヤートコセーヨーイヤナー
めでためでたの伏木の浜辺ヨーイトナー ソーラン アリャエーノ
ヨーイトコ ヨーイトコナー

古老などにより長く歌い継がれてきた祝い唄だったが、昭和40年代には保存会が結成され、「手踊り」や「扇子踊り」、「^{かひ}櫓踊り」などの流し踊りが創作された。近年は船の出港に併せて行事を行うことはなくなってしまったが、地区の小学校の運動会や、年に一度開催される伏木港まつり、^{しょうこうじ}勝興寺でのイベントなどの大きな行事の際には、決まって催されている。

こうして、船の航海の安全と無事が祈願され、民衆の結束がさらに強められ、町ではいつもと変わらぬ港町の日常が繰り広げられていく。